

にして、字の大き各三尺あまり、飛動してすべて鸞鳳のはねらつがごとし」と記している。また天保一〇年（元元）の『紀伊統風土記』に詳しい文があり、その「友島」に「役小角、葛城を開くに沖島を以て開首とせり、友島、日本後記に伴島と書けり」とある。

また観念窟も『名所図会』に「行者径といふ、これを窟に入るの正門とす。石巖は上に聳え、下は不測の淵に臨み躬を巖壁に着く、わづかに蟹行すべし、一跌されは忽砕粉となる」とある。この岩壁は、修験が盛行した江戸時代において最初の葛城修行の地にふさわしい行所であったことがわかる。

また「関伽井」は「海潮の上る所にして、今は井なし」とあり、江戸時代にはすでに湧水の井戸ではなかった。

また「深蛇池」は、「池周回十町許、水なし、唯蒲草叢生す、池中石碑」とあり、いまも砂丘の後背湿地となって、湿地性植物群落の植生地として和歌山県の天然記念物に指定されている。「剣池」は、「是則ち修験道の徒伝へいふ、小角神剣を得るの所にして、神島の名による所なり、今栗島に鎮ります少名彦命、天津神代のむかし渡り来ませし地なるをもつて、かくは名に負へるにこそ」と加太淡嶋神社の旧社地としている。



虎島の岸壁修行

- ⑦幕府の命で、和歌山藩が仁井田好古を総裁に編纂した紀伊国の地誌で、天保一〇年（元元）に完成した（復刻版・歴史図書社一九七〇年）。
- ⑧友ヶ島の東端、南側にある。
- ⑨友ヶ島の北にある小島で、中央に剣池がある。

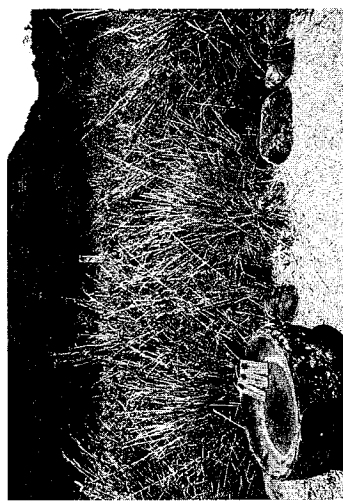
序品第一経塚は、鎌倉初期ごろと推定される『諸山縁起』には、「阿布利寺、序品、七池あり。蓮花池といふ」とあり、近世の『葛城峯中記』には、「阿布利寺、若原島、序品岩屋納経也」とある。

この序品の経塚と阿布利寺は、ともに友ヶ島と加太海岸に対応して「序品」をなしていたと考えられる。原文の「若原島」は「苦原島」とも解され、若原島≡苦原島≡友原島と推定される。なお「原」は牧場があったと『紀伊国名所図会』にある。

『紀伊統風土記』には、「阿布利寺は村の坤（南西）の方八、九町にあり、天台宗にして修験者の行所なり、其乾（北東）一町許を供僧カ原といふ」とある。いまは加太の町屋の北に阿振川があり、阿振伽不動の小祠がある。

また「七池」は、室町期の『葛城峯中記』に、「華血池 伽陀寺の西、錫杖池 地蔵庵、勤行池 村内塚下、水神池 向谷の下、御所池 御所谷、蓮華池 安心塚下、右七ヶ所、古来ハ池ト申也。今ハ井と申。七ヶ所之内一ヶ處ハ退転」とある。

このうち花血井、錫杖井、蓮華井は、『紀伊国名所図会』にも描かれ、水神井は堤川の南、小字水神にある。御所井は御所谷の「弘法井戸」で「山の井」ともいわれた。



深蛇池

⑩復刻版第一輯五二八頁。

⑪復刻版一卷四七五頁。加太の北川栄三氏の御同行を得た。

『紀伊統風土記』の「善喜庵井」は、向井家の井戸とも考えられ、昭和三年（二五〇）に村の東端の小嶽地蔵にあった錫杖井の石碑を移建している。また「不老井」は南海電鉄加太駅の西構内にあった。

迎之坊と伽陀寺

葛城の行所を管理支配する坊が、加太の「迎之坊」である。

加太の町屋の入口に向井家の屋敷が現存する。門を入ると錫杖井があり、邸内は広く、いまも聖護院の巡行には立ち寄り、また接待をしている。

『紀伊統風土記』には、「相伝ふ昔時、役小角葛城山経歴の時、其祖、道に迎へしより迎之坊といふとぞ、聖護院宮支配にして此地の行所を司とる坊なり」とあり、また正和元年（三三三）の文に、伽陀寺別当向井加左衛門とあり、「寛文年中（二五二―七）までは、善鬼嘉左衛門と云しとぞ、善鬼は役小角の従者の筋目の者といへり聖護院宮入峯の時も此坊に宿せらる」とある。同家には什物として、役行者毎丸印紋や古鏡二面があり、一面は剣池より出土したといわれている。また修験の歴史を物語る葛城峰中に関する古文書が所蔵されている。



向井家

⑫ 復刻版第一輯五一九頁。

⑬ 京都市左京区の本山修験宗の総本山、天台宗寺門派の大本山。円珍の開基といひ、一二世紀末に増譽が入寺してから修験道の本山となる。

⑭ 復刻版第一輯五二三頁。

友ヶ島の序品窟を「第一ノ経塚」とすれば、山伏の「一ノ宿」は伽陀寺であった。

『紀伊統風土記』には、「葛城嶺第一之宿、妙法峯転法輪山伽陀寺と称す修験の行所なり。相伝ら当寺は役行者の開基にして、延喜帝の勅願にて堂舎御建立あり、天正の兵火に堂塔伽藍、鐘楼、鎮守、楼門、僧房等皆烏有となる。夫より衰廃して今は小堂二字あり、寛永記に古は境内も広大なり、今は方一町といふ、本尊薬師如来古仏なり」とある。

この旧地は、南海電鉄加太駅の北に接した段丘上にあつて、付近は畑地や住宅となっている。

加太、向井家所蔵の文化四年（二五七）の『葛城一之宿伽陀寺由緒旧記録書上』には、「葛城第一宿妙法峯転法輪山伽陀寺、本尊薬師如来、脇立十二将神、堂三間四、葛城七大童子堂、伽陀寺境内ニ在之一間四圍」と記され、天保一〇年（二五元）ごろより以前には、本堂と童子堂の二字があつた。

現在、その尊像は、向井家に隣接する常行寺の薬師堂に仮安置され、修験者や地元の人が尊崇する。

そして伽陀寺別当、迎之坊の支配した修験の行所は、享保一〇年

⑮ 復刻版第一輯五一六頁。

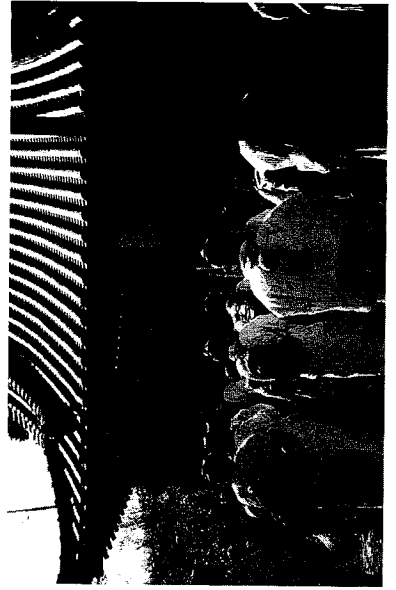


伽陀寺の跡

(三三) 七月の『葛城一之宿御行所書上目録』に、「本尊薬師如来乃役行者御作、脇士月光日光等十二神将右同作、往古堂蔡伽藍鐘樓鎮守之社三玉門金剛童子其外僧坊数多有之由家ノ旧記相見申候、乱世以来退転致^⑮於今者薬師ノ本堂、金剛童子、別嶋泊、今八幡宮宝殿相残御座候」とあって、その転退の様子が書かれている。しかし、このような伽陀寺や行所は加太郷七村が謠誦に勤めたとも記されている。

加太の行者堂は、港の真上の山上にある。『紀伊統風土記』に「観音山の続き阿字ヶ峯といふにあり、修験の行所なり、迎之坊支配す」とあって、いまも加太の行者講の人々が世話をしている。ここからは友ヶ島をはじめ一ノ宿一帯を遠望することができる。

なお行者像は、行者堂の西の淡嶋神社の境内にもある。『紀伊統風土記』の「能満堂」に「淡嶋社の前山の尾崎にあり、本尊虚空蔵菩薩、定朝の作といふ役行者像あり最古物なり。此堂は文明年間(二四六)淡路の僧十穀覚乗の建立する所、淡嶋神社の本地仏とす。此時淡嶋神社と両部に祭りしといふ」とあって、鑑流して有名な淡嶋社は、延喜式内社であり、加太荘の産土神であるとともに、もとは神仏混淆の社でもあった。



加太の行者堂

- ⑮「加太荘」の加太・磯脇・本脇・日野・深山・大川の六村。
- ⑰復刻版第一輯五二七頁。
- ⑱復刻版第一輯五二六頁。
- ⑲仏教の金剛界と胎藏界。

二、二ノ宿と神福寺跡

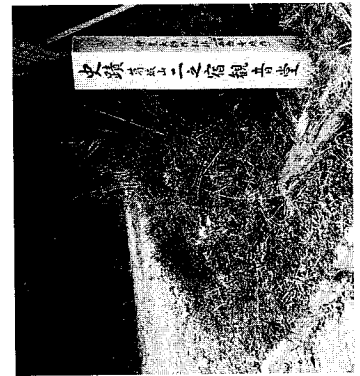
神福寺の経塚

加太の一ノ宿、伽陀寺から東へ堤川にそって北東の日野集落の東の谷を溯ると二ノ宿、神福寺の跡がある。

二ノ宿とは、この日野にある光福寺、西庄の北にあった神福寺、そしてその北の佐瀬川にある慈眼寺をいう。なかでも神福寺はその中心的存在で境内も広く、ここに葛城二十八品の第二方便品の経塚がある。

江戸時代には、加太一ノ宿の行所を巡行した一行は、東ノ谷ぞいの日野集落に入り、光福寺をへて神福寺の峰に登った。

この光福寺は、日野集落の北端にあって、『紀伊統風土記』には、「寺の後に阿伽井あり、山臥の行所なり。昔此地に十輪寺といふ寺あり。嘉吉(二四一)の文書にあり、廢亡の後其跡に此寺を建しとい



二ノ宿観音堂跡

- ①「ウツも方便」と世間でいわれるように、人によって例をあげて世の人を導く教えで、法華經の二大中心をなす教義。
- ②復刻版第一輯五二六頁。